

黒崎です。自分が所属する日本山岳会石川支部の会員で大幡さん（大聖寺の深田久弥山の文化館のお世話をされている方です。）から添付の PDF 文章についてお尋ねがあり、金沢大学にかつて勤務されていた「小泉磐夫」という先生の情報があればぜひ知りたいとのことです。どなたかこの件についてご存じの方がいらっしゃいましたらと思い、HP に掲載をお願いする次第です。

もし、何かご存じの方がいらっしゃいましたら黒崎 (ichie@bronze.ocn.ne.jp) まで直接メール頂ければ幸いです。

山の歌

小泉磐夫

こうした部屋で何時しか筆者が聞き覚えた次のようないう歌がある。作詞、作曲者は今もって不詳である。
お前はそんなに何故歎く
草のしとねに寝ころんで

私の言うことお聞きあれ

人の浮世の家を捨て。

和寮六番、第一高等学校旅行部。

スキー、輪カン、ピッケル、シュラフ、キスリング等々、

壁に戸棚に雜然たる自習室は、時をかまわぬ大学生先輩の窓から土足のままの闖入に土埃にまみれ、とても勉学にいそしめる雰囲気ではなかつたが、皆さん結構、口ほどにもなく良い成績で進級し、授業をきぼって山旅に出掛けるスマートさをも身につけて行つた三ヶ年であった。

このスマートさの筆頭は、わが時代では北八こと小林太刀夫氏であり、医務室のダス娘をどう手なづけたのか、心臓弁膜症なる診断書付の欠席届を出して正々堂々と山へ行き、やがて自らは心臓医学の大家として東大医局に君臨される。その他の面々も何時の間にか、合成化学会社の研究所長、証券会社専務取締役、以下東大教授三名、大蔵、通産の大ボス官僚等々、筆者の前後の和寮六番の住人にとって、この三年間の体験は意外に重要な役割を担っていたのかも知れぬ。

口笛吹いて身を休め

うつつの夢を見ていあれ

くたびれ休めに山を見て

腹が減つたら又歩け。

筆者は東大を停年退官後、北陸の金沢大学に出向中、はからずも同学のワンドル部の学生がこの歌詞を唱うのに驚いた。四十年の歳月と遠い距離とをへだてて、誰がどうして伝えて来たものであろうか。曲には昔の面影はなかつたが、歌詞はまぎれもなくこの歌であつた。

先輩諸兄にこの歌の由来を伺いたいものである。

歌についてもう一つの思い出は、鹿沢の湯の丸あたりのスキーリングであつたろうか。筆者の時代の冬と春のスキーリングは燕温泉だったから、恐らく時は二月の紀元節あたりだったろう。突如としてこんな合唱が巻き起つた。(曲は「夕焼け小焼け」である。)